

『癩患者の告白』を読む－4

後藤 隆

Content Analysis of Leper Confessions (1923)-4

Takashi Goto

Abstract: This paper analyses no.2 case text data among over 100 lines 12 cases in Leper Confessions(1923). Corresponding 2 categories:<characters>or<negative expressions and episodes around the leper> to the keywords of no.2 case text data based on the previous KWIC(KeyWordInContext)analysis outputs, we find <negative expressions and episodes around the leper> and the relieved everyday events descriptions make ‘figure and ground’ contrast, as if trifling with the confessor's life.

Key Words: Leper Confessions, Content Analysis, KWIC(KeyWordInContext)analysis, <characters>/<negative expressions and episodes around the leper>category

要旨：no.2 ケースのテキスト・データのすべてのパラグラフについて、『癩患者の告白』-3 で得た KWIC 分析結果に基づく<登場人物>/<癩病観>カテゴリーを対応させたところ、ネガティブなく癩病観>と束の間ほっとする日常生活のできごとの描写が、多様なく登場人物>とともに、入れ替わり立ち代わり、まるで告白者を翻弄するかのよう、「地と図」のコントラストをなしていることなど、新しい知見を得られた。

キーワード：『癩患者の告白』、内容分析、KWIC 分析、<登場人物>/<癩病観>カテゴリー

『癩患者の告白』を読む－4

後藤 隆

はじめに

本稿に先立つ『『癩患者の告白』を読む－3』では、内務省衛生局による『癩患者の告白』(①、172-282頁)所収の106名の「告白」中、100行を越える12ケースの内、連番2(<『癩患者の告白』>整理表、②、39-47頁)の「緒言」を除く「私の発病の第一期」「父子の対面」「喜びと苦しみ」「一家の整理及瓦解」「渡る世間に鬼はなし」「入院と洗禮」「復生病院の創立と沿革」「魔鬼の罟」「失明」「騒動の顛末」「別れの一言」「希望」各パラグラフのKWIC(Key Word In Context)分析の結果を、先行文脈:キーワード:後続文脈の concordances list (③、p44)の形で図表5～16に示した(⑤、27-39頁)。

指定キーワードは、もともと「緒言」パラグラフのKWIC分析(④、32-34頁、36頁)から得られた2つの知見、すなわち1)「個別の人物<家族親族<社会的地位/役割<ライフステージ<「人類」等の総称)のように「個別<総称の包含関係を有する」「多種の登場人物」、2)「多種の登場人物」の「先行/後続文脈」に「癩病」「患者」への「嫌悪、敵視」や罹患身体「部位、症状」等の「過酷でネガティブな癩病観」(⑤、26頁)がみられること、をベースとしたものである。

ただ、紙幅の制約から、『『癩患者の告白』を読む－3』では、「私の発病の第一期」～「希望」各パラグラフについても「緒言」同様、上記1)、2)の知見が得られるものかどうか、解説を記すことができなかった。そこで、本稿ではあらためて、連番2のすべてのパラグラフ、すなわち「緒言」～「希望」について、1)、2)、そしてそれら以外の知見を探ることとする。

- ①復刻編集版『近現代日本ハンセン病問題資料集成』、2003年第2刷、不二出版
- ②後藤隆「『癩患者の告白』を読む」、『日本社会事業大学研究紀要』第63集、2016年度
- ③Weber, R.P., *Basic Content Analysis*, 2nd ed., Sage Univ.Pr., 1990
- ④後藤隆「『癩患者の告白』を読む－2」、『日本社会事業大学研究紀要』第64集、2017年度
- ⑤後藤隆「『癩患者の告白』を読む－3」、『日本社会事業大学研究紀要』第65集、2018年度

1. <人物>/<癩病観>カテゴリーによるKWIC分析結果の再整理

そのために、これまでのKWIC分析結果について、各パラグラフ中の語句が、「多種の登場人物」を表す<人物>カテゴリー、「過酷でネガティブな癩病観」を表す<癩病観>カテゴリーのいずれに対応するかがわかるように、再整理を行う。KWIC Finder (Ver.3.30 copyright 2000-2014. hishida)の「テキストビュー」で赤字出力される指定キーワードをWord2010で、<人物>カテゴリーを表す下線、<癩病観>カテゴリーを表す波線に置換したものを、「緒言」～「希望」の順に示す。なお、これらカテゴリーを読み取る際不要と思われる箇所は(略)としてある。

[連番2「緒言」パラグラフ：<人物>/<癩病観>カテゴリー<]

私の最も嫌いな物が二つある。一つは蛇で一つは癩病患者であります。両者は私ばかりでなく世人一般から嫌はれて居る。……或日佛國王ルドビコ九世が臣下に向かつて云える様大罪を犯すと癩病にかゝるとわ何れが悪しきかと。此間に答ふて臣下は異口同音に然り、癩病なりと。勿論ルドビコは宗教に熱心なるが故に宗教的感念より此の問ひを發したのであらうが臣下は俗人なるを以て普通人情より之れを答へられたのであらう。……世間一般に何人も癩病を恐れざるはなく又は程嫌われる物はあるまじ。只癩病と云ふ文字すら忌嫌われます。況んや患者が路傍に徘徊するの時或は自宅にあつて仕事に従事するの時彼等を目撃したる人々の心は如何ん。憐れだと思ひましようか、氣の毒だと思ひましようか、否寧ろ戦慄するであらう。……見る人に於て斯如くんば病む其れ自身は何んと感じるであらう。他の病と異つて二年三年で全治する物ではありません五年十年は愚が一生空しく朽ち果て、仕舞はねばなりません。……如何程神信心を致しますとも全快の見込がありません。始めの内こそ美しけれ次第に重れるにつれて頭髮は脱落し唇はたゞれ睫ははだかり、腫物は皮膚を覆ひ爲に皮膚全體が靡亂して臭氣プンプンとして同席する能はざらしめる故に人之を名づけて癩臭と稱す。頭は禿げてランプの如く足は落して鬘となるもあり鼻骨は落ち頬肉はそげ、或は盲目となり取り返しの付かぬ不具者となり一、擧げ來れば枚擧に遑なく世界中を駈け廻るとも斯る珍物を見出す事は能はざるべし。其の容貌と云い其の手足と云警える言葉を見出すに苦しむ。故に人は人三化七と誠に適當の譬かと思ふ。……之を醫者に聞くと黴菌は内部迄侵入して居ると云ふ。外部の穢態は誰にも知れる通りであるが其れ自身の最も遺憾に堪えないのは麻痺其れである。知覺脱失する事である。感覺の鈍る事である。時によつて足の本を切つても大火傷をしても本人は一向平氣で他人から云はれて始めて驚くと云事や人蔘と牛蒡の喰い分けがつかぬ人さえある。専門醫でない限りどうして此の患者の状態が察しられようか。如何程細かに書たとて到底人々に了解させ得ると云事わ不可能の事と思ます。或る醫者が此麻痺と云事に付て學理上でなく實地に知りたいと云て居た處困吹き荒ぶ冬の或日水門の埃(ゴミ)を佛わんとて自身川中に入りたりき。やがて宅に歸り行きしが餘りの冷さに途中にて下駄の脱げたるをも知らず歸りぬ數居をまたぎて始めて洗足なるに氣がつきさては患者の麻痺もと思つたと云。……是は單に一例に過ぎない事であるが事々物々斯の如し。其の局に當るとか其の境遇に接すとかして初めて理解されるのであらうと信じます。一、少年にして此の病出でんか學問は愚か禮儀作法も知らず家庭夫婦交際上の事柄も知らず徒らにダマツ子となつて果てるのみ。二、青年にして病い出でんか學校は中途にして退學し商家の丁稚なれば解雇され發奮すべき好時機を失しあたら有爲の青年をして葬り去らねばならぬ。三、壯年に付て考えて見んか多年の辛苦漸くなりて妻を娶り家庭を結び之より大いに努力せんとする際斯る病に犯されたならば兩親の嘆きは如何ぞや。又最愛の妻子にも別れて仕舞はねばなるまい。四、年寄り功成りて最早用なき物なれば死んでも宜しい癩病に罹つてもかまはんと云人あれど其れには又相當の理屈があるもので餘命幾何もなく死に恥をかくと云うは殘念であると云ふ。斯様に考へ來れば嫁であらうが舅であらうが老若の別もなく皆悲惨の極であると思ふ。……聊か重複に涉るが讀者咎むる事勿れ、吾れをして今一と筆書かしめよ。……東海道は三島の在に一郵便集配人ありき。彼れは長男にして一人の弟あり赤貧洗ふが如くさなきだに苦しき折から彼の弟は三十七八にして尚獨身である。最も性質は低能らしく常に兄の厄介者で加うるに癩病であつた故兄の困憊は一方ならず、女房の恩愛にかられて人道に反くとは知りつゝも血肉を分けた弟を殺そをと企てた。或日とある橋上に連れて行きそれ汝の行く處は此處だと後より突き落した。眞逆様に落されながら彼れは流石に命が惜しく人殺し人殺しと悲鳴を掲げて助

けを乞た。兄は其れに驚き愴然として色を失ひ駈けより詫びたと。……之れは直接本人の云ふ處を其儘である。二、沼津在に吉太郎と云う少年があつた。母は早く世を去り父は年に似合はぬ若い後妻を娶り後妻は大抵悪心者が多く此人も其一人であつた。財産などはないが女心の淺聞しさに夫をそゝのかして彼の少年を草津に追やつた。草津と云へば有名の温泉で彼等の如き貧困者がどうして療養に勵むことを得ん。少年は幼少なれば他國の空を見るは始めてにして頼る人なく宿るに金なく只だ泣くばかりなり。僅かに人の情けによつて野に伏し山に寝て日を経て故郷え歸て見れば驚くべし。鬼の様な夫婦は逸早くも何方ともなく引越して問えど行先を知る人もなく只大聲をあげて泣くのみ。少年に何んの罪があらうか。嗚呼悲惨なり（悲惨なり）彼れは病める爲めなるか。其後數日を経て彼等の隠れ家を突留め嚴重にかけ合ひたるに二、三回人前に對して少年の元え尋ね來りて十一文もあらんか、穴だらけの古足袋をもち來り一度はついでなりとて鶏卵一個持ち來れりと聞く。嗚呼何たる事ぞ、その足袋！其の鶏卵は何の爲なるか。少年も吾れも恐らく其本人以外知る人はなからん。……少年の臨終の時涙ある祖父の葉書きが來た。之れを見た少年の欣喜雀躍生れてはじめて葉書きが來たと!!! 見る人をして轉た無量の感を起さしめた。今その言にせめて一度汽車の辨當を喰つて見たいと叫んだ。之れに依つて之を思うに少年の生活の一端を窺う事が出来る。其外學識名望ある人の内幾多日蔭物に朽ち果てるのでありましょ。何んと恐ろしい事でありませんか。一度此病いに犯されたなれば概ね斯の如くして遂に家は亡び縁談は破綻となり絶えず家庭に風波の絶間なく親子夫婦親戚兄弟等に至る迄互に憎み互に嫌い暗室に閉されて自滅するの外なからん。爲に或は放浪し或は自殺し一層一思ひに死の宣告を受けた方が遙かに増しだと思ひます。故に此世に神佛はなしと云ひ自暴自棄に陥り狂い死にする人もあります。要するに世人是を遺傳と云い傳染と云うも論者に任すとして兎に角患者の不幸は一家の不幸、引てわ一國の恥となり其の子々孫々に至る迄蛇蝎の如くに嫌われ穢多の如くに疎まれる者無慮二萬餘と云うに及んでわれ驚嘆の外わない。之れは實に國家の敵である。人類の大敵である。……私は吾が半生を告白するに先つて聊か此處に緒言として述べ置くものである。

[連番2「私の發病の第一期」パラグラフ：<人物>/<癩病觀>カテゴリー]

北海の空は一圓に灰色の雲に覆われ前夜來の雪は絶えず降り積つて足の踏場さえなかつた。其れでも夜が明けると例の通り友達の○○ちゃんが迎ひに來て呉れた。母は氣遣つて今日は學校を御休みようと云われたが私は友の迎へに來て呉れた勇氣に勵まされて降り積る雪を踏シメシメ學校に行つた、學校は未だ始業時間前の事とて集まつた生徒は暖爐を取りまいてがやがや騒いで居た。(略)十時頃友の一人が私の膝に浸みのあるのを見てや一怪我をしたぞまくつて見ろと云われてまくつて見ると大きな水腫れが眞赤になる迄むけて衣類の上迄浸み出して居のを見た。自分より教えた友の方が遙かに驚いたらしい。眼を丸くして黙つて居た子供もあつた。先生を呼ばをかともある。中には痛いだらうと慰めて呉れるものもあつた。けれども怪我の原因は少しも判らなかつた。直ぐに暇を貰つて歸る事にした。……家の揚りかまちに腰を卸した時はぶるぶる振へてやつとの思ひで一聲御母さんと云つた丈けである。目が醒めた時には枕元には藥瓶や蜜柑や菓子杯あるを見た。思うに醫者や近所の人達の心配の跡がありありと窺がはれる。氣分は稍快復した様であるが體一面に汗ばんで居た。臭氣は室内に漲つて親達は心配そうな顔であつた。驚くべし、前日と同様の水腫が腕と脛とに恰度十三、足が悉く靡亂してあはび貝の様な形ちで手の付け様もない下女はあれあれつと馳せ寄つた母親は無言の儘やがてわあつと泣き伏したので一同は俄かに騒ぎ始めたが暫くにして又靜かになつた。醫者が來た脈を取り聴診器をあて、見て一寸首をかしげて居たが手足の傷を數へ

て居た母は最前から待ち兼ねた様に涙を拭き拭き尋ねた。「先生一體何んと云ふ病氣でしょう……」。醫者は迷惑そうな面持で「左様な別に別に内部に異状はありません。此の雪の爲に寒さに當てられて少し熱が出たので病氣の名なぞ何んでも宜いじやありませんか。癒りますよ、屹度癒りますよ」。と答は簡単であつた然し要領を得ない。母は「こう成つては家でも治療も出来ずどう云方法にしたら」と醫者は「困りましたなあ、然し一ヶ月も過ぎたら癒りましょ。別に入院する程でもありません。治療法としては御家は幸廣くて殊に人手も澤山御ありなさるから家でやつた方が御子供さんの爲に宜敷い」と云捨て、歸つた。之が私の九歳の時であつた。彼の醫師はつい二、三月前此町へ開業した〇〇某であつた。最も福山松城町に△△病院があつて多くの患者は其處に治療を受けて居た。然し〇〇醫師は△△病院の其にも増して遙か技倆が秀て居つたし近所でも在る處から來診を乞うた。母は信用ある事として其の言葉を信じ其後は毎日下女を薬とりに走らした。母は醫者となり看護婦となつて私の治療につとめて石炭酸の瓶や軟膏や綿花や繃帯や金盥は座敷一杯に散らされて足の踏み所もない程であつた。最も是れは私の宅は下宿屋で下宿の巡査、郵便局員とか銀行員が毎日出勤した後の私の外科場である。而し母の骨折りも素人の悲しさに捗々しからず全快迄には丸く五ヶ月の長い月日を費した。其の間下宿の多くの人達は種々のいやな臭を嗅ぐので大分臭い臭いと不平の言を洩すのを聞いた。……之を聞く親達はひそかに嘆息を洩したけれども客の多くは薄給の官吏として賄のよいのと宿料の安いのとで喜んで居た。〇〇醫師は一見癩病たることを知つたが云ては營業上の障りになると家族の迷惑とを知つて病名を知らさぬのは實に情けの深い人であると後で感謝する様なものである。自分の傷も醫者の薬と母の介抱とにて漸く癒えたが之が抑も癩病の第一期で専門醫は眼球によつて見分けると云ふ。俗に癩病筋と云のがあつて絶えず首筋やひじ筋が腫脹して居るのを見る。之は患者自身も心得て居るが他人の目に觸れる迄には十年もかゝると云ふ。之に依つて考えれば自分は母の胎内より病毒を受けて來たではあるまいか。實に恐ろしい事ではないか。小さい私は病の床にあつて毒を斷つ爲に正月が來ても餅一と切れ魚一尾喰はれるでなく倦き倦きした鰹味噌と粥に依つて僅かに生命を繋いだのであつた。友達の声が往來に聞ゆる時友達が私を見舞に來た時又自分を覗きに來た時床の上にある私は子供ながらに早く癒つて皆と一緒に遊びたいと思つた。

〔連番2「父子の對面」パラグラフ：<人物>/<癩病觀>カテゴリー〕

※この「父子の對面」パラグラフは、タイトルどおり、幼時に別れた実父と告白者が転居先で再会する経緯が主であり、「是から此處に居られるかと思えば見るもの聞くもの皆嬉しく水道の捻を見たり二階三階の電燈を悪戯したり時には公園に、芝居に、輕業に、手品に、又用もないのに鐵道馬車に乗つて市中を徘徊しては二三日面白く過た」「俺も父があるのかと思えば聊か肩身が廣い様な大人になつた様な氣もして其後毎日毎日父の元へ遊びには行ては市中を見物さして貰つては楽しい日を送つた」など、明るい記述もみられる。次の引用は、そうした記述の後、最終行より数行前の部分である。

或日私の腕に大きな田蟲が発見された。「之れは何んだらを婆やこんな物が俺れの腕に出來た」と私はコー云て見せた。祖母は一見醫者の如く田蟲だと云た。翌日近所の醫者に見せると眼鏡越しに「之れは田蟲だから二三日薬を塗れば癒る」と果して二三日の内に癒つた。

[連番2「喜びと苦しみ」パラグラフ：<人物>/<癩病観>カテゴリー]

※この「喜びと苦しみ」パラグラフの冒頭から1/4ほどは、伯母等からの金銭的援助で「一家揃うて面白可笑しく暮した事もあつた」と振り返っているが、以下引用の冒頭「神は此一少團樂を何時迄もつゞかしては置かなかつた」以降、告白者の病が重症化し周囲にわかるようになり、最後は自殺を試みるまでに追い詰められていく。

(略) 春夏秋冬花開き花散るは自然の法則であるが神は此一少團樂を何時迄もつゞかしては置かなかつた。私は一寸した霜焼が元で素人の治療では少し過ぎたので一日をきに船場町の××醫師の許に通つた。斯くする事二三ヶ月、傷は捗々しく癒らなかつた。私は學校えも醫者えも通つた。傍ら家の用事も足した。或日郷里から來て居る某が警部の試験の爲逗留した。私の顔を見て「○御前の顔は」と云たが後は無言であつた。祖母は折々母に「○の顔を見よあれを氣付かぬか」と鋭く云う……顔の水腫と云い眉毛の薄くなつた工合と云いどをも只ではない……隣家の人達は「何んの病いだらうを御氣の毒ですな……之は御母さんの胎毒でせう其れなら草津に行けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母は若い時分名所古跡を見物に出て草津の事は教えて呉れる人より詳しく知て居たので其の都度「御金がありませんからね！」と××醫者は母の事に通じて居た故に非常に同情して氣長に治療しなさい薬價等はいつでも直い姉に云いなさい(私は母を姉と呼んだ) 姉と呼ぶ可く餘義なくされるのも皆營業上止むを得ないことだ。薬價は段々滞る遂には小供心にも行き悪くなつた。私の病氣は知らぬ者とてないのに母は迷つて癒るか癒るかと諺に親馬鹿とは此事か。遂に學校も中學一年を卒業試験間近になつて辭さねばならん様になつた。前途の抱負も希望も悉く破壊された。祖母は重大なる事件の爲に一ト月程家を明けた。其の僅三十日計りの間に私の病氣は非常に進んで來て母は漸く其れと知つた。或日の新聞に名醫を照会して讀めて曰「如何なる病も彼の醫者に診察を乞う時は一人として癒らざるなく恰も奇跡の如し。病める者の母、貧者の慰め、云々」と嬉しさのあまり幾度も讀み返した。醫者は元町三七△△某某の人である。氏は博愛なる基督信者にして温厚篤實の君士、數多の修道女と共に細民の救済に努力して居た。私も此人の薬を呑む事になつたが醫術の進歩も如何なる名醫も癩病丈は駄目だつた。親子共失望した。祖母が歸つて來た時には目も開かぬ程に顔が腫れて居た。幾所の傷さえあつたので室内は蒸せ返る様な臭いである。祖母は女に稀な大聲で怒號し罵倒した。「畜生め、此の家鴨(アヒル)め、こんな態で親に孝行が出来るか片輪め片輪め福山に居ればよいのに手前に欺されて函館に來たのが悪かつた。手前に旅を歩いても金も碌々送らず二人の子迄任して置いて何時年寄りに樂をさせる積りか。馬鹿馬鹿しい、國元に下宿屋さえ營んで居れば何にも不自由は無いのに、大きな家を賣つてこんな立てば頭がつかえる、屈めば尻がつかえる借家借りは始めてだ。系圖が汚れる。祖父に濟まぬ。武士の家を汚した。犬畜生め犬畜生め」此の系圖の言葉には母も私も少なからず泣かされた。母も私も其の流れを受けて見れば身を切られる程で返す言葉はなかつた。澤山もない財産は次第次第に傾いて下女も犬迄も暇をやる事にした。可愛い、弟迄も何處かえやり度いと思つた。一家の支持に月々貳十五圓を超過するは男としても仲々樂でない。況んや女子の細き腕に於てをやだ。今から見れば何物も安價の明治三十年頃とは云え家賃五圓に白米四斗が六圓幾ら、木炭が大吠一俵八拾錢より壹圓五錢、石油一罐壹圓六七拾錢の北海道で祖母は家庭の不滿より毎日仕出し屋より數奇な物を喰て來る。家政は亂るゝばかり、母は益々不安と恐怖とを感じ苦しい中にも下女も犬をも其他總てを勞つたが一人の弟を奉公に出さねばならぬと語つた。祖母は之れには反對であつた。其他何にかと故障が起る。益々家庭は亂れて風波の絶え間はなかつた。嗚呼此の恐ろしき家内の動亂は諸君は之を何と考へられるか。互に憎み

合ひ憎み合ひ兎角來客に對して思はず粗略になつた。氣丈な母もやけになつた。御座敷も出ずして家の瓦解せんとする時誰あつて之れを助けると云ふ人わ無かつた。慈みの神は既に逃げ去つたのであらう。伯母は始めの内こそ母と共に家政を助けて孝道を盡して居たが祖母の行跡に付てつくづく愛想を盡し何處とも無く姿を暗まして仕舞つた。いくら尋ねても皆目知れなかつた。△△某も何某も更に來なかつた。嗚呼世は暗黒恰も太陽の西山に入つたと同じであつた。最早頼る可き人もなく世間の同情も全く絶えたので母は眞から神に祈つた。私の爲に、熱心に祈つた。而し神わ此時眼を閉じて居たのであらをか、耳を塞いで居たのであらうか、但しは留守であらうか、將又母の熱心が足らぬのか、愈々母は絶望して仕舞つた。草津に御前をやらなければなるまいと直ぐ金子の才覺に取りかゝつたが其れは駄目だつた。百圓二百圓の金で此の難病が癒るものでないと聞てわ聊かに心細い話だ。衣類やら帶指輪等も入質した。諸々の借財も滞り勝となつた。斯かる場合に至つても祖母は飽く迄強慾の人だけに、何一つ自分の品を手離さなかつた。況んや所持金をやだ。而も高利を貸す程の財を以て尚金錢は他人と同様な考で、一更冷淡に構えて居る。残忍とも極悪とも人非人とも云ひ度い位だ。三井岩崎の富は何程あれ共自分の爲には何の役には立たん。我等親子は神佛の加護も失せたのか。天を恨み地を恨み世をも人をも呪ひ尚富者をも呪ひ暮した。此の不幸なる母は私に向つて云ふのに「親に孝行しようとして折角國から母を呼び寄せてこんな苦勞をさす積りではなかつたのに、せめて祖父さんが御存命であるなら私達も是程迄零落もすまいものを」と平素斯る愚痴を云つた。「頼みと思ふ祖父さんは早く死んで鬼の様な御婆様んが長生して其上御前は病氣に罹つて私も御前でも無かつたならとくに此處を逃げて仕舞つたのよ。一層の事一思ひに御前を殺して其上自害しようとして幾度思つたか知れん」と涙ながらに親子泣き崩れるのも珍らしくない事、私は母に云われる度び子供心にも如何に情けなかつたか知れない。私は將來の爲にも一家の爲にも一層死んで災いの根を切らう。武士の血を穢した此の病、俺の敵だ。よし俺は死んで見せんと疊を蹴て奥入り疊を裏返して双肌脱ぎ先祖傳來の小釧（ヅカ）の鞘を拂つた刹那、猫は飛び付きて私を慰むるが如く一聲鳴いた。押せ共退け共去らず。爲に自分の手は鈍つた。嗚呼思えば如何に自分は薄志弱行であるか、是程の苦痛と將來の身の上とを案じて一旦死と決して此の僅猫一疋の愛に溺れて死を思い留まるとは嗚呼不甲斐なき者よ。

〔連番2「一家の整理及瓦解」パラグラフ：<人物>/<癩病觀>カテゴリー〕

※この「一家の整理及瓦解」パラグラフの前半は、告白者の祖父が、明治維新を境に商売で成功した旧幕藩体制下の士分であり、「何町の〇〇と云えば可なり知られた顔役であつた」ものの、その死後、経済的にも、後を継ぐ子にも恵まれなかつた「〇〇家の大略」を紹介している。その後、下の引用が続く。

（略）婆々は非常に怒つた。「馬鹿め、今此の弟を他家へ出したなら家は斷絶する。〇の様な不具者で後を嗣ぐ事が出来ると思うか!!!」（略）祖母は曰く「〇は汚れたる病によつて長男を廢嫡せねばならん。若し弟を養子に遣ると〇〇の家は誰が再興するか。家は斷絶して先祖に對して申譯がない。腐つた忤は何の要はない。尊い者は健康の弟一人である」と、母は「系圖も大切である。弟も無論大切であるが病む者をば親に非らずして誰が見て呉れる人ありや。健康なる弟は裸で置ても誰か拾ひ揚げて呉れる」と、両者共是と非を判ち難い。私は勿論母を有難く感ぜずには居られぬ。此の論が原因となつて一家は遂に四離滅裂となつた（略）

[連番 2 「渡る世間に鬼はなし」 パラグラフ：< 人物 > / < 癡病観 > カテゴリー]

家の没落と共に私は僅かの旅費をもつて便船を求めて青森に渡つた。津輕の唐子温泉に行かん爲であつた。船中に同情厚き天理教の布教師に彼是れと問ひつ語りつ自分の病氣に同情して遂に墓口から三十錢を出して酔子でも買いなさいと詫げる様にして渡して呉れた。其して「私は東川町一二八天理教會何の誰と妻の外娘達が居ります。君が若し函館へ歸つた時には尋ねて行き給え。君一人位何とかして御世話してあげます」と最も慈悲深き言葉であつた。(略) 私は或温泉宿の前に立つて宿を乞うた。家の者は私の顔を見ると一も二もなく拒絶された、隣から隣に二三軒悉く拒絶された。私は道傍の松の根に腰を卸して腕を拱いて考へた。空は未だ夕焼の色消え失せぬのに時を急ぐ晩鳥姦しく宿るに家無き自分は益々暗黒の世界に落ち行く様な悲しさと寂寞とを感じた。恐れ多くも、後醍醐帝御製に「いかにせんたよる蔭とて立ちよれば又袖濡らす松の下露」と。自分も黙して居ると何處ともなく死ぬ死ぬと悪魔の囁き、前には大きな川があり水田には蛙が罵るが如くに……宜し此川へと思へば先方より二人の男が私を見付けて「誰だい」、「はい」と答へて聞かる、儘に答へた。可愛想にと私は云ふが儘に行く橋を越して木賃宿の札が見えた。一人の男は先に這入つた。絶切れ絶切れに聞く處は病人だからとめて呉れと云ふのだ。嫌ない其んな位なら鑑板を外せ、聽て男は来て「漸く御前を泊める事にした。安心して泊まんない又來よ」と立ち去つた。男達は土地の若衆であつた。私は御蔭でニヶ月此所に居たが山中の事として七圓の食費も毎日美味と思つて喰はなかつた。此の温泉の効能は梅毒によいと私も多少効があつたかとも思つたが僅かの争から此家を立つたので折角の治療も水の泡……又川部驛で乗車する都合の處斷られたので重い足を引摺り引摺り線路傳いに行つた。前に横たはる大河汽車道以外の橋は見當らず。元へ戻るには一里半、儘よ鐵橋傳いと……中程行くと後ろより汽笛を鳴らして汽車は驀進して來た。私は其の瞬間の狼狽は廻らぬ筆に到底十分の位置も書き得ない。此の絶體絶命何と分別するか全く青くなつた。未だ死ぬない、少し先に工夫の避ける僅かの餘地を見出した。汽車は反響甚だしくして益々迫つて來る。漸く駈け込んだ時は汽車中の人は皆見て居つた。是程宜い死ぬ機會に遇た儻に尚生を惜むかと自らを笑い又何如にも業病だとも深く感じた。死ぬと云ふは誰でも結して宜いものでは無い。然るに日々の新聞は自殺、投身其他を報じて居るは正しく或物の誘惑であらう。私が青森驛に着く時には舉動不審と見られて憲兵巡查に調べられた。私が病氣を隠す爲に帽子眞深に色眼鏡をかけて居たのですりと見たらしい。連絡船は明朝と聞いて失望した。唐子で短氣を出さずに居れば宜いのにと愚痴も出た。其夜の宿には唐子以上に困つたので短氣は損氣と云ふを深く経験した。零落れて袖に涙のかゝる時人の情の奥ぞ知るゝ……宿もなく私が徘徊するを見て或一家の妻の同情に依つて雨露を凌ぐ事が出來た。暖かい飯と鹽焼の鯛とは王子焼以上の美味で夜の明けるも知らずに熟睡して漸く乗船することが出來た。船に乗つても故郷の家の模様と昨夜の情け深い人妻の顔が髣髴として先を見、後ろを見て夢の様に港に上がった。相生町の家は貸家の札が貼られて居るので隣家の人に聞くと鶴岡町何番地と俣を飛ばした。母は私を見て非常に立腹した。「御前の病氣を癒す可く今金の才覺中であるのに歸宅するとは慾を知らん。親不孝者奴」と云はれて見るといくら私でも是の語に一言半句も返す言葉は出なかつた。當分の内此處の二階を借りる事にしたが亭主の言うのに「貴方は晝の内は往來の方へ顔を出さない様にして下さいと御承知の通り私の家は水菓子屋で營業の妨げに成るから」と。私も初めの内は我慢したが遂には障子を掛けて外を見る事もあるので何時か小供に見られた物と見えて或日亭主が來て「御母さん誠に申兼ましたが家の都合上一時御立退きを願ひたい。實は出來得る丈御世話致す考でありましたが世間の噂が甚だしいので店の梨子も、りんごも賣れ行きが悪い様で一家の經營に差支へては一家の

經濟が取れません」と。又此の家をも追出された母の辛苦は並大抵では無かつたらう。其翌日又或一軒の貸家が見付かった。潮留町の○番地八疊と四疊半とで長屋の事とて厠は外にある。臺所と庭は狭いが私には誠に宜い隠家であつた。或一日母の身の上に付て二三の來客があつた。世を偲ぶ身の襖を手早く閉じて奥に這入つた。三十分一時間未だ客は返らぬ二時間更に返る氣色はない。私は小便が膀胱から破裂しそをになるので陰部を確かりと押えて早く返つて呉れば宜いと只管念じたが却つて客は此の暑いのに襖を明け様では無いかと云う母も驚いたらうが私も困つた母の空咳を合圖に押し込みえ駈け込んだので其の時に手を放した爲押し入れの中へ小便大便迄是迄に經驗の無い事をした。客の歸つた跡で母は笑つた。私は随分苦しかつた。而しこんな事では癩病の常で誰でも同病者の覺ある事と思ふ。母は三度目の嫁入を餘儀なくされた。而し私迄連れて行く事は出来ぬ、どをした物と種々と考えた様だが更に名案も浮かばない。私は元町二耶蘇教會の慈善病院長ニオネヅム女に救いを乞うた。前にも云える通り女を童貞と呼びて一身を神に捧げて社會救濟の爲に雨の日風の日の別なく函館の市中を歩いて貧困者を慰問する人に専ら御願した。早速許されて私は戸籍謄本を携えて駿河の國の不治の裾野の病院に入る事になつたわ後の事。世に無神論者あり、神佛の有無を論ず。然らば吾等の如き不幸の輩は如何にして生命を全うするを得ん。神は正義なり、誠を照らしオネヅム修道女をして我等親子を愛の懷ろに抱かした。蓋し之を神ある證據と云わずして何んぞ。謹んで今此處に謝意を表す。

[連番 2 「入院と洗禮」 パラグラフ：< 人物 > / < 癩病観 > カテゴリー]

山紫水明の地、將た又閑靜なる別天地 是即ち静岡縣富士岡村神山復生病院である。私は當病院に助けられて衣食住に少しも不自由を感じず今迄の苦痛は夢の様な気持ちに成つた。私は癩病の事をあまり知らなかつたが多くの人は能く色々の事を説明して呉れたが私は性來の激情心で癩病と云われるを好まなかつた。故に自分は胎毒で癩病と違つたと其都度癩と胎毒と皮膚病との區別を知らぬが兎に角自分の思つて居た事は是迄の病症の變化と他の人の云所と少しも違はなかつたので始めて癩病か…。而し思うに此醫術の進で一心に治療して癒らん筈がない。人は癒らなくとも自分丈は癒て見せると又其れで無ければ家の再興は出来ぬ。又癒らねば又再び母と逢う事が出来ぬのみか一生日蔭物で朽ち果てるかと思へば地に伏して慟哭した。友が慰めて呉れ様がどうしようが更に無言であつた。故に他の患者は「今度來た小僧は氣が狂つた」と。否自分は發狂もしない。而し自殺と感念は失せて自暴自棄に陥つた。而し世に是程恐ろしい物はない。其れには信仰も義理も人情も一切を破壊し盡さねば止まん。人を呪ひ世を呪ひて……。一青年が折々自分を慰めた段々馴れて自分は或日神に付て質問した。宗教的に明確の答を得た靈魂に付ても又確答を得た又或時は口角泡を飛ばす事もあつたが眞理には敵せず屈服されて自分の一切の疑問は快刀亂麻の如き答へで自分でも満足した。徒らに貴重なる命を失うも魂は未來永遠迄も存在する事と一切は神の攝理の内に歩み而してその善惡の爲に賞罰を受ける。洋の東西を論ぜず、貴賤貧富の別もなく、皆死は免れぬ者と。死後に残るものは唯善と惡とのみ、我は十七に死んだのだ。五十年百年の壽命を保つたからとて必ずしも人生の幸福とは云はれぬ。徒らに醉生夢死するよりは眞の信仰其れを以て誠の幸福と云はねば成らん。自分は此處に於て是迄社會の憎惡とひがみと其外一切を捨て、仕舞はねば成らんと遂に明治三十八年五月御昇天の祭日に於て院主バルトラン師に依りて洗禮を拜受した。バルトラン師及私の信仰に付て語る可き事柄多くあれ共此處に略す。

[連番 2 「復生病院の創立と沿革」パラグラフ：<人物>/<癩病観>カテゴリー]

明治十幾年頃であつた故テストヴィード師が東海道諸國に布教の爲諸國を巡回の折柄續、癩病患者が路傍に徘徊して居るのに出會ひ甚だ憐れみ同情の念を動かされた。或日駿州御殿場で一人の女癩病患者を見るに及び愈々同情の念を起し茲に此の不幸者を救ひて一には彼等を助くと共に一には以て世の助けとせんと決心した此の女癩病患者と云ふのは此の悪疾に罹るや借老を契つた夫に捨てられ、親戚に疎外され廣き世界に便る者なく、驛外れの小川の上に板で僅かに雨露を凌ぐ丈けの小屋を造り其中に一人淋しく寢起きして居た。彼女は病の爲に眼が見えなかつた。唯さえ困るのに俄盲目の全く外出の自由迄失つた。寢るに一枚の蒲團なく襤褸を集めて寢具に代へ板の上に伏して居た。村人の恵に依り僅か一日に一椀の麥飯と一杯の水とで辛くも生命を繋ぐと云ふ。飼主のない犬とても斯く迄悲惨な物ではないと思はれたと云。彼女は斯かる惨な境遇に絶え兼ねて自殺しようと思はれたとか。其時幸ひテストヴィード師が尋ね行き人は死んでも其の靈は永遠に消ゆる物で無い事を懇ろに説き聞かせ廢殘の人生をもて餘して居る彼女を慰められた。嗚呼世に安穩の生を送る者の爲には死は左程痛切に感ずるものではない。彼女は世に類ひ少なき不幸な者であつたが爲却つて死後に一道の光明を認める事が出来其苦しみの生を慰める機會を持ち得たのである。彼女の如き慇懃むべき癩病者が御殿場の附近には少なからず居た爲に茲に於て師は蹶然として此の不幸なる者を救ふべく起つたのが是の病院の建設される動機であつた。(略) ……外人の爲に種々の不便の勘からざるに土地の買入、縣廳との交渉、家屋の建築、患者の治療、醫者と看護人との詮索、藥餌食料の購求等總て自分一人の手で便じられた。斯く何人の助けも無く身一つで此の煩雜なる要務を便ずるに加えて村民は此の前例なき事業に目を恃て、自然の情として此の忌はしき病院を建つことを嫌ひ、種々なる苦情を持ち込み、妨げの運動を試みるら、師の此際の苦勞は實に一通りで無かつたと云。(略) 二十六年に至つてベルトラン師が此の事業を繼ぐ事になつた。僅かの間に院主は三度代つた。私は此の方の御世話になつた。因みに當院の組織は極小人数で要務一切を辨じた。院主と醫者と幹事と小使と一人づゝと、働き得るゝ程度の患者をして必要の野菜を作り、牛馬を飼ひ、山林に薪を取り、院内の草取り掃除等をさせた。當院の所有地は二ヶ所有つて一は約七町歩、其處には種々の建物と二町歩の畑とがある。是れから得る野菜で一切を充たした。故に少しも不自由はしなかつた。(略) 馬は五頭で農に使ひ、牛は牡六頭牝一頭で、患者に用ゆる乳を搾る。(略) 購求するものは米鹽丈で、味噌醬油等は皆患者の手に成つた。一年の經費凡六、七千圓と聞く外基本財産と云ふ物も無く、前年度の繰越金が三千圓位あると云ふ。患者は大抵、七、八十名居て自分の家の如くに働いて居る。私の居た時分迄には收容者數は四百八十七名で、死亡者が二百五十六人有つたと、娛樂としては圓遊會、芝居、又は折々富士登山、箱根見物、兎狩、氷三等、之等は必ず院長も友として、一日を愉快に遊ぶ。患者の外出は自由であるが、警察も地方人も何の干涉もないのは、此の病院の特長とする處である。治療は一通り研究するものゝ更に効果は見えぬ。後藤博士の處方及び東京(トンキン)産の「ホアンナン」に依つて多少治した様に見えても退院後再び入院する者もあつた。目下土肥博士、全生病院長光田醫師の教えに基く大楓子油を採用して盛んに服藥に注射に務めて居る。

[連番 2 「魔鬼の罫」パラグラフ：<人物>/<癩病観>カテゴリー]

(略) 動物の本能として恂うしても堪へ難い物は戀であらう。春は蕨狩に、秋は菌狩に、夏は富士に、箱根に、皆此の戀には打勝つことは出来なかつたから、是れを制するには教に近づくより外ないと思ひ、

私は常に教理を研究した。御堂えも行つた。御祈りもした。けれ共一端其の場を去ると又以前の邪慾に捕捉された。(略) 私がいくら情慾を斷たうと祈つても、魔の力は偉大なもので、仲々壓え切れなかつた。私の様小供の時からの病人でも、而も此の宗教病院に居て、深く戀の苦痛を感じた事を、此の豚の様に喰つて居て、寢て居れば直い病人に而も二度も死のをかと思つた事のある自分に、恁んな魔なぞと恥かしい話ではないか。……自分は今此の樂園に這入るに及んで、精神に油斷が出来た。如何なる英雄も戀の爲には一國一城を亡くするに於て吾々凡人に於ては寧ろ當然の事で全く下劣の根性に陥つた。恁うして居る内病氣は多少快方に向つた。根性とは是れも正反對で又是の正反對が災の源であらう。自分は或一婦人の爲に見事戀の擒となつた。人間である以上、婦人は悪くない。而し社會の人達と違つて自分如き癩病に女の必要は認めぬ筈だ。而も孤兒の御恩を蒙つて居る身に女の愛に溺れるなど意氣地の無いにも程があると思つた。……よし地獄に落ちようが、教に反し様が、毒を喰はば皿迄の譬に日々の御祈りもせぬので、他人から邪推もされた。外出も拒まれた。餘りの苦痛に或日院主に事の旨を告げた。(略) 情慾に悩む様な時には私の所へ御出なさい。相談相手になりますと懇々慰めて呉れた。私も有難涙にくれて室に戻つた。……其翌日は早速母の許に手紙を出した。……回答の文面に曰く「私は貴方よりもつともつと悲しい！親ぢやもの、子ぢや物、何時まで御前を獨身で置く氣はありません。兎に角二十五歳迄御待なさい。其の時に家の再興を頼みます。御前の様な病氣の者は身を謹まなければいけません。病院の御恩を忘れて不義をしてはいけません。其れこそ神様の罰を受けるばかりでなく親にも背きます。……親子の縁も切ります。……」讀み終つた私は幾度も讀み返して茫然たらざるを得なかつた。而して絶望の嘆息を放つた。然しよく考へて見ると悉く自分が矛盾して居る事に氣が付た、全く夢から醒めた様に。假令日本の法律が癩病の結婚を許してあるにせよ、私の結婚は正義正道とは云へない。又之れは社會道徳上、由々しき大事である。假りに結婚したとせよ、必ず子供が出来る。然らば其子が生存競争に打ち勝つ丈けの健康の體になるか、若し病身であつたならば自分が十七年昔め來つたことを又鏡にかける様な物だ。又キリストの教の第五誡に「汝人を殺す勿れ」とは此處の事だ。公衆の爲には己れ一人を犠牲にならねばならぬ事は教の愛である故、行者達は尊き身を慈善事業の爲無報酬で獨身生活を送つて居るではないか。ソクラテスの「己れを知れ」の一句は如何にも價值あると此處に至つて結婚を斷念して仕舞つた。(略) 情慾は人の最もかり易き誘ひにして、人は是を些細の事なりと云も、よくよく研究し來れば、戀は實に罪の源にして、之れが爲には眼暗らみ、智慧も、親も、國も、信仰も、何の其だ。實に恐ろしい事では無いか。私は是れに勝たん爲、總ての勞働と、斷食と、祈禱もしたが、直接感化を與へたのは勞働でも、祈禱でも、斷食でもなく、只生ける手本、即ち愛の實行者、即ち院主ベルトラン師であつた。

[連番 2 「失明」 パラグラフ：< 人物 > / < 癩病觀 > カテゴリー]

私は前にも云通り院長の訓誡と、其の人格とに依つて、僅かに邪念を拂ふ事が出来た。と同時に、以後は決して其様な考を起さない様に努めた。(略) 院主と一夜を炭小屋に明かした事もあつた。……山の頂上に登つて、四方の景色を見渡した。其の盛觀!!! (略) 救主イエスキリストが數多の天使と共に昇天遊ばしたオリベト山上も斯くやと思はれた。……全國五ヶ所の癩療養所と、私立病院數ある中に恐らく是の位の所はないと思ふ。一難去つて一難來る。此の愉快な生活も一時の現夢に過ぎなかつた。基督教では此世を涙の谷と云ふ。神は再び私を試みた。永久に取り返しのつかぬ盲目と!!! 或朝の事、何時迄待つても夜が明けぬ。人に聞けば太陽は高いと。醫の診察を乞た。藥用も効なく、遂に霧の中を歩行する様であつた。人は穢な

い物を癩病に、憐れな物を盲目に譬えた。私は其の憐な一人、而も癩病の……。若し自分に基督教の教が浸みて居なかつたなら、人の笑ひが皆癩の種では無かつたらうか？（略）癩病と健康の盲目とは対照にならぬ。前者は眼こそ不自由なれ他は悉く完全なる者だ。後者は眼以外何所にも一として備はりし所なくして到底比べにも何にもなる者でない。患者は此種の盲目多くして長命せば、必ず盲目となると云ふも過言ではない。私は遂に丹精も空しく、失明して仕舞つた。……發病當時より以上の悲しみを再び味はつた。癩病で死し、盲目で死し、三度目の死こそ永遠の死では無からうか。

[連番2「騒動の顛末」パラグラフ：<人物>/<癩病観>カテゴリー]

※この「騒動の顛末」パラグラフでは、ある入院者がもたらした国立療養所の待遇（作業手当など）に関する噂をきっかけに、復生病院のそれとの比較が患者間で問題とされ、患者幹事を通じた院主との折衝、患者の逃走、院主による患者の退院処分など、一連の「騒動」が記されている。次の引用は、告白者によるその「騒動」評である。

（略）患者の希望は悉く水泡に歸し、内部の動搖甚だしく、院主を誹謗する聲は從順と云はれし者迄も一齋に唱えて、尊敬の念は更になく、信仰も、服従も殆どなく、全く人間は感情の動物かとは確かに思はれた。
(略)

[連番2「別れの一言」パラグラフ：<人物>/<癩病観>カテゴリー]

※この「別れの一言」パラグラフは主に、「騒動の顛末」パラグラフの「騒動」の際、「院の革正を促さんと血氣の小勇に誇り、更に前後の考えも無く聖職者を傷け」たことに自責の念を感じた告白者が、復生病院を自ら退院した後、收容された東京の国立療養所で、生前のベルトラン氏と最後の再会をし、許しを乞うエピソードである。次の引用は、その中の、告白者なりの国立療養所評である。

（略）流石は名に聞く病院丈けに職員も多く、設備も完全で、宗教の自由も與えられてあるので格別苦痛も感じなかつた。私立と官立と違う所は、靈と肉、即ち靈の本位と肉の本位である。浮浪患者の割に多いのに反して、喧嘩もなく、量見も廣く、反つて住みよい様に思つた。自分の信仰と同じ者も居るので、永く御世話になる事になつた。（略）

[連番2「希望」パラグラフ：<人物>/<癩病観>カテゴリー]

癩病者を全部收容して下さい。最も國家の經濟上不可能事かも知れませんが、現在都下各所の浮浪者丈けでも嚴重取締つて下さい。扶養義務者に引渡された人達は今更國へも歸れず、旅から旅へと流浪して社會に害毒を流します。日暮里、田端は其の巢窟、自宅隔離及之等は何も當てになりません。患者を取締るに嚴重なのは誠に結構です。而し其者としては餘り有難くないが、國家人道の爲と思へば何んともありません。其の代り一つ御願があります。一、療養所を千人迄とする事 一、境界を排して外出の自由を許す事 一、全生院と慰廢園と復生病院との長所を取つて研究して下さい 復生病院は治療の不完全と情慾の壓迫。全生院の最も苦痛とする所は貧弱なる者にあり。是れに多少の金を施して下さいに願ひし、逃走を防ぐには浮浪患者に根柢最も深し。是れを取締る事第一、次ぎは待遇如何に依つても容易に出來ると思ひます。宜敷御調査の上速やかに御實行の程を願ひます。

2. 連番2「緒言」～「希望」各パラグラフ及びパラグラフ間の特徴

1. の〈人物〉/〈癩病観〉カテゴリーによる KWIC 分析結果再整理に基づき、連番2の各パラグラフ、そしてパラグラフ間の特徴に接近することが可能となった。④、⑤で得られている知見を含め、順に解説する。

「緒言」パラグラフについては、既に④で示した（④、32-34頁、36頁）とおおり、2つの知見、すなわち1)「個別の人物〈家族親族〈社会的地位／役割〉ライフステージ〈「人類」等の総称〉のように「個別〈総称の包含関係を有する〉」「多種の登場人物」、2)「多種の登場人物」の「先行／後続文脈」に「癩病」「患者」への「嫌悪、敵視」や罹患身体「部位、症状」等の「過酷でネガティブな癩病観」をあらためて確認できる。さらに、今回、1. の「再整理」作業から、新たに指摘できることがある。それは、「緒言」に記された〈人物〉や〈癩病観〉が、「緒言」パラグラフ以降のパラグラフに記された告白者個人の個々の体験そのものとは限らず、例えば「佛国王」や「一郵便集配人」のように、また「頭は禿げてランプの如く足は落して躓となるもあり鼻骨は落ち頬肉はそげ、或は盲目となりて取り返し付かぬ不具者となり一、擧げ来れば枚擧に違なく世界中を駈け廻るとも斯る珍物を見出す事は能はざるべし」のように、おそらく伝聞等に頼ったものであろう、〈人物〉や〈癩病観〉の引照先の拡張がみられることである。なお、こうした伝聞等、告白者が当時「癩」を語るに用い得た語彙については、「ハンセン病」や「癩」をキーワードに新聞等データベースを検索した武田徹の先行研究（「感染忌避言説の生成と伝播：ハンセン病隔離政策をめぐって」『恵泉女学園大学紀要』28号、2016）があり、筆者も調査中である。

「私の発病の第一期」パラグラフでは、級友の見つけた「大きな水腫れ」、その後の「驚くべし、前日と同様の水腫が腕と脛とに恰度十三、足が悉く靡亂してあはび貝の様な形ちで手の付け様もない」など、告白者の病状と、診察した「醫師」「母」等周囲及び告白者の病識が、ハンセン氏病と疑ってはいるようだが確定したわけでもない、微妙なずれを示している。「私は子供ながらに早く癒つて皆と一緒に遊びたいなと思つた」はその表れであろう。

「父子の対面」パラグラフは、「私の発病の第一期」パラグラフでの病状と病識のずれを承けてか、※で注釈したように専ら、幼時に別れた実父との再会談である。パラグラフの終わり近く、「大きな田蟲」に気付くものの、「醫者」「祖母」も、「二三日の内に癒つた」とする告白者も、病状と病識には依然ずれがあるように読める。

「喜びと苦しみ」パラグラフでは、ところが急転して、※に注釈したように、周囲も告白者本人も、病状と病識が一致し始め、その途端、「醫術の進歩も如何なる名醫も癩病だけは駄目だつた」「前途の抱負も希望も悉く破壊された」「系圖が汚れる。祖父に濟まぬ。武士の家を汚した。犬畜生め犬畜生め」「最早頼る可き人もなく世間の同情も全く絶えた」と次々と絶望を感じ、「涙ながらに親子泣き崩れるのも珍らしくない」中、「私は將來の爲にも一家の爲にも一層死んで災いの根を切らう」と追い詰められていくのである。

「一家の整理及瓦解」パラグラフでは、「喜びと苦しみ」パラグラフでの「祖母」の「系圖が汚れる」を引きずるように、告白者の病によって「一家は遂に四離滅裂となつた」と記されている。ここで注目すべきは、※の注釈のとおり、告白者自ら「可なり知られた顔役」であった

祖父まで「系圖」をたどっている点である。こうしたいわば過去の先祖の栄華は、「瓦解」「一家」と強烈なコントラストをなす、いわば悲劇の「地」となっている。

「渡る世間に鬼はなし」パラグラフは、上記「家の没落」を契機に、告白者にふりかかる様々な出来事が、時系列を追って、「慈悲」や「同情」と「悲しさ」「寂寞」「死」が入れ替わり立ち代わりするように記されていく。すなわち、船中での「天理教の布教師」の「慈悲深き言葉」⇒宿を次々に断られ「家無き自分は益々暗黒の世界に落ち行く様な悲しさと寂寞」「自分も黙して居ると何處ともなく死ぬ死ぬと悪魔の囁き、前には大きな川があり水田には蛙が罵るが如くに…… 宜し此川へと」⇒宿と掛け合ってくれた「土地の若衆」⇒「線路傅い」の途中「汽車」から逃れ「是程宜い死ぬ機会に遇た僻に尚生を惜むかと自らを笑い又何如にも業病だとも深く感じた」⇒「憲兵巡查」に怪しまれる⇒「或一家の妻の同情」⇒「母」からの「親不孝者奴」⇒水菓子屋の二階の仮寓「営業の妨げ」⇒転居「隠家」⇒「小便大便迄是迄に経験の無い事をした」⇒「母」の「嫁入り」で一人取り残される⇒「駿河の國の不治の裾野の病院」（復生病院）につながる「修道女」、のようにである。先行する「慈悲」が「地」となって「寂寞」の「凶」を浮き立たせ、その「寂寞」が今度は「地」となって「土地の若衆」の親切を浮き立たせる。こうした凶と地のコントラストの小刻みな連なりは、標題「渡る世間に鬼はなし」とは異なっており、ふりかかる様々な出来事に翻弄される告白者の姿を強く示唆しよう。

「入院と洗禮」パラグラフには、「復生病院」入院「今迄の苦痛は夢の様な気持ちに成つた」ものの、「癩病」と認めがたく「自暴自棄」「人を呪ひ世を呪ひて」いた告白者が「神の攝理」によって「我は十七に死んだのだ」と境涯をうけとめ「憎悪とひがみと其外一切を捨て、」「洗禮を拜受した」と記されている。「渡る世間に鬼はなし」パラグラフでの翻弄の姿に照らせば、安堵に近いのだろうが、「一切を捨て、」「神の攝理」を恃むほかない告白者を、どれほど追い詰められていた、と私たちは受け止められるのだろうか。

「復生病院の創立と沿革」パラグラフは、キリスト教宣教師が「女癩病患者」「彼女の如き慙れむべき癩病患者」のために、慣れない日本の地で年月を費やし修道院にも似た自給自足の療養所を開設、運営にあたった「沿革」が記されている。告白者の入院時には「警察も地方人も何の干渉もない」穏やかな運営状態だったようだが、収容者に比しての死亡者数や、「治療は一通り研究するもの、更に効果は見えぬ」医療レベルが案じられる。

「魔鬼の罟」パラグラフは、この告白ばかりではなく『癩患者の告白』所収の他の告白にもみられるものだが、性を主題にかなり踏み込んだ内容が記されている。「入院と洗禮」パラグラフの「今迄の苦痛は夢の様な気持ちに成つた」入院生活を送る内に、おそらく「病氣」が一時「多少快方に向つた」こともあったのだろう。「或一婦人の爲に見事戀の擒となつた」「いくら情慾を断たうと祈つても」「仲々壓え切れなかつた」。なんとか自制しようと、「此の豚の様に喰つて居て、寝て居れば宜い病人に而も二度も死のをかと思つた事のある自分に、恁んな魔なぞと恥かしい話ではないか。……自分は今此の樂園に這入るに及んで、精神に油断が出来た」「全く下劣の根性に陥つた」「自分如き癩病に女の必要は認めぬ筈だ。而も孤兒の御恩を蒙つて居る身に女の愛に溺れるなど意氣地の無いにも程があると思つた」と自責をめぐらし、「院主」や「母親」に相談もしてみる。「院主」は穏やかに応じるが、「母親」は強く返してくる。「親

子の縁も切ります」。『絶望の嘆息を放つた』ものの『然しよく考へて見ると悉く自分が矛盾して居る事に気が付た、全く夢から醒めた様に』。假令日本の法律が癩病の結婚を許してあるにせよ、私の結婚は正義正道とは云へない。又之れは社會道德上、由々しき大事である。假りに結婚したとせよ、必ず子供が出来る。然らば其子が生存競争に打ち勝つ丈けの健康の體になるか、若し病身であつたならば自分が十七年嘗め來つたことを又鏡にかける様な物だ。性の先に「必ず出来る」「子供」が「生存競争に打ち勝」てる見込みがなく「子供」の将来は「自分が十七年嘗め來つたこと」を映す「鏡」にしかならないとまで案じ、その不安によって捻じ伏せるように性を自制するための、『正義正道』『社會道德』そして宗教。だとしたら、告白者の思想に危険が混じるのではないか、と私たちは批判し得るのか。

「失明」パラグラフでは、『一難去つて一難』『永久に取り返しつかぬ盲目』がふりかかる。それは『發病當時より以上の悲しみ』をもたらす『永遠の死』の前の二度目の死『癩病で死し、盲目で死し』であった。『魔鬼の罟』の『邪念を拂ふ事が出來た』ほっと束の間とのコントラストが息苦しいほどである。

「騒動の顛末」パラグラフは、『復生病院の創立と沿革』パラグラフで描かれた、信仰をベースとした自給自足型の穏やかな運営を実現していた『病院』秩序とコントラストをなす『騒動』を扱っている。『水泡に歸し』た『患者の希望』、『院主を誹謗する聲』の中で削られていく『信仰』。『全く人間は感情の動物かとは確かに思はれた』。既に二度目の死『失明』のふりかかった告白者はなにをあきらめたのだろうか。

「別れの一言」パラグラフは、※に注釈したように、『騒動』を境に復生病院を自ら退院した告白者とベルトラン氏の再会エピソードだが、引用箇所は、『騒動の顛末』パラグラフの『騒動』のきっかけとなった「ある入院者がもたらした国立療養所の待遇（作業手当など）に関する噂」と内容上重なるところがある。ベルトラン氏に許しを乞うことと、国立療養所を『肉的本位』と評価することは、告白者の中でどう整理されていたのだろうか。

最後の「希望」パラグラフは、『國家人道の爲』『患者を取締る』『全部收容』を前提に、しかし『其の代り』『御願』として、療養所の人数上限、『外出の自由』、『治療の不完全と情慾の壓迫』の改善などが謳われている。この前提と『其の代り』の『御願』とに、まとめて、『希望』と題したのはなぜだろうか。

※ここでこのような問いかけによって、筆者は、フーコーの言う「注釈」の役割を期待する。フーコーによれば、『注釈は、(中略)沈黙のうちに分節化していたものを述べる』『役割』を持つという。(フーコー、中村雄二郎訳『言語表現の秩序』、河出書房新社、1992、27頁)『國家人道の爲』『患者を取締る』『全部收容』の前提と『其の代り』の『御願』とに、まとめて、『希望』と題したのはなぜだろうか』とは、その相容れない面をもつ『前提』と『御願』とを分別せずに、あえて『希望』の下にまとめたのはなぜか、という意味である。

むすびにかえて

1. でのKWIC分析再整理と2. でのその検討を通じて、④で得ていた知見1)、2)、すなわち<人物>カテゴリー、<癩病観>カテゴリーが各パラグラフに確認できるだけでなく、

「喜びや苦しみ」の「急転」の表現のようなパラグラフ間での特定のパラグラフの役割や、「魔鬼の罨」パラグラフの「一難」が払われたその後の「失明」パラグラフのようなパラグラフ間のコントラスト、そして「渡る世間に鬼はなし」パラグラフのように、ひとつのパラグラフ内で、「慈悲」や「同情」と「悲しさ」「寂寞」「死」が入れ替わり立ち代わり、図と地を交代するように小刻みなコントラストを重ねていくなど、連番2の告白の全パラグラフを分析してみなければわからない知見を得られた。100行を越える他の告白について、同様の知見が確認できるかどうか、今後の課題としたい。